一

塾の講師が休むことになって、早めに帰宅をした。
といっても、帰るのは自宅ではなく、従兄の家だ。

僕の母親は離婚して、ばりばりに働いている。朝から夜遅くまで会社にいて、家のことも僕の世話もできないから、近くに住む母親の妹、僕にとっては叔母に代わりに面倒を見てもらっていた。

叔母には一人息子がいて、僕より四歳上の高校一年生。

僕が幼いころから叔母さんの家で世話になっていることもあって親し

く、兄のような存在だった。

性格が明るく社交的なので、家にいることは少ないけど、このごろは二人でゲームにはまっていて、帰宅後に一緒にコントロールを握っている。

今日もきっとゲームを先に進めたくて、僕の帰りを心待ちにしているだろうと思えば、家まで駆けたくなるというもの。

息が切れるあまり「ただいま」が声にならなかったものの、かまわずに玄関に上がって、居間に駆けていった。

けど、てっきりソファに寝転がって、待っていると思っていた従兄の姿が、どこにも見当たらなかった。

拍子抜けして、しばらくはぼんやりと居間に突っ立って、呼吸が落ち着いてきたら、二階から物音がするのに気づいた。
ぎしぎしと、床が軋む音。

まだ小学六年生で、性的な知識に疎ければ、射精も夢精もしたことがなかった僕は「縄跳びをしているのか？」ととんちんかんなことを考えて、二階の従兄の部屋に向かった。

階段を上りきるころには、ベッドが軋む音、荒い息遣い、息遣いに交じった甲高い声が聞こえてきたものを、まだぴんときていなかった。

だから、いつもするように声もかけずにドアを開け放った。

従兄は上半身裸で、やはり上半身裸で制服のスカートだけ履いている

女子を組み伏せ、その股の間に下半身を押し付けていた。

肝心の部分はスカートに覆われて見えなかったものの、従兄が腰を押しつけるたびに、そこからは粘着質な水音がたって、二人とも蒸気が立ちそうなほど肌を赤くし、熱く吐息するさまは、異様だった。

二人とも行為に夢中で、僕には気づかなかった。
僕は僕で、目の前の行為が何なのか知る由もなく、それでいて目が離せずに、口を開けたまま見入っていた。

僕が釘付けになったのは従兄の横顔だ。

いつも明るい笑顔を絶やさないその表情が、苦しげに歪みながらも、目が熱を帯びてとろんとしていた。

ふと、従兄が動きを止めたなら、その目が僕に向けられた。とたんに、鼓動が激しく打って、顔だけでなく体の指先まで熱でかっとなった。思ってもみない自分の体の急変に戸惑いつつ、下半身の疼きに反射的に前かがみになって、そのまま顔をあげないで、勢いよくドアを閉めて駆けていった。

けど、熱っぽさと下半身の疼きのせいで、体が思うように動かなくて、結局、隣の仏壇のある和室にしか逃げこめなかった。

襖を開け放ったなら、畳に四つん這いで倒れこんで、呼吸を乱れさせながら、おそるおそる下半身を見た。

熱く脈打っている、今までにないそれの感覚にも動揺したものの、ズボンを押し上げて、変形しているさまを目の当りにしたなら、眩暈がするようだった。

父親がいなく、母親とも疎遠で、学校での人間関係も薄ければ、授業にさぼりがちで保健体育をほとんど欠席していたせいか、僕はそれが何なのか、本当に分からなかった。

病気になったのかと不安になったし、どうすればいいのかも、もちろん知らなかった。